

# 第1巻:「あなたの前で、おかしくなっちゃう……」夫の目の前で蹂躪され、快楽に堕ちていく妻の甘い絶望。

## 第1話: 妻の寝息に疼く、禁断の寝取られ妄想

箸が止まっていた。

ゆきこが丹精込めて焼いてくれたハンバーグは、いつもなら頬が落ちるほど旨い。なのに今夜は、咀嚼するたびに舌の上で味が霧散し、食道を通り抜ける頃にはただの温い塊に成り下がっていた。

向かいに座るゆきこの視線が、俺の手元に注がれている。

それが分かっている、顔を上げることができない。目を合わせれば、この瞳の奥で蟠っている暗い炎を読み取られてしまう。ゆきこは昔からそういう女だ。俺の些細な体調の変化にも、仕事の不調にも、いつだって真っ先に気づいてしまう。

「あなた、今日もあんまり食べてないわね」

柔らかく、しかし芯のある声。純粋な心配だけで編まれたその響きが、胸骨の裏側をじわりと灼いた。

「……ちょっと胃がもたれてて」

咄嗟に口をついた嘘は、自分でも呆れるほど薄っぺらかった。ゆきこの眉がかすかに寄る。信じてはいない。けれど、追及はしない。それが彼女の優しさだった。

その優しさに甘えている自分が、心底おぞましい。

食後、俺が皿を流しに運ぶふりをして背を向けた瞬間、ゆきこの小さな溜め息が背中に触れた。聞こえないふりをした。聞こえないふりをするしかなかった。

一人になったリビングで、ソファに深く沈み込む。テレビの電源は入れない。暗い画面に映る自分の顔が、蛍光灯の光で青白く浮かんでいるのが視界の端に入った。

——いつからだろう。

この病が俺の中に根を下ろしたのは。

記憶を辿ると、最初の兆候は結婚して半年が過ぎた頃に遡る。ゆきこと体を重ねる夜、彼女の肌に触れるたびに、頭の隅で別の映像がちらついた。

最初はほんの一瞬。蠟燭の火のように揺れては消える、取るに足らない妄想だと思っていた。

ゆきこの白い太ももの間に、俺ではない誰かの手が割り込んでくる。見知らぬ男の太い指が、俺の妻の柔らかな内腿を押し広げる——そんな映像が、行為の最中にふっと浮かぶ。

最初は、反射的にそれを振り払った。こんなことを考える自分は異常だ。ゆきこを愛しているはずの俺が、なぜこんな映像に下腹部を疼かせるのか。

だが、振り払うほどに、映像は鮮明さを増していった。

ゆきこの喘ぎ声。その声を引き出しているのが俺ではない。見知らぬ男の腰が、俺の妻の柔らかな体にめり込んでいく。ゆきこの細い指が、その男の背中に食い込み、爪が白い跡を刻む——。

頭の中でその映像が再生されるたび、ペニスは裏切るように脈打ち、射精はいつもより激しく、深く、長く続いた。

絶頂の瞬間だけ、視界の端が暗くなった。胃の底に鉛の塊が沈むような重さと、背骨を這い上がる電流のような快感が、同時に体を引き裂く。その感覚が癖になった。

一度覚えた毒は、二度と抜けない。

自慰のたびに、妄想はエスカレートした。顔のない男は輪郭を持ち始め、体格を得て、声を得た。ゆきこの体を知り尽くした手つきで、俺よりも巧みに、俺よりも深く、俺の妻を味わい尽くす。

その映像を頭に流しながら射精する夜が、数え切れないほど続いた。

そして、妄想だけではもう足りなくなった。

ゆきこの隣で眠れない夜が増えた。彼女の穏やかな寝息を聴きながら、暗闘の中で一人、拳を握りしめる。シーツを掴む指の関節が白く浮き上がるほどに。

この欲望を打ち明けることは、絶対にできない。

ゆきこは清廉な女だ。結婚するまで俺以外の男を知らなかった。付き合い始めの頃、手を繋ぐだけで耳まで赤くなっていた彼女の横顔を、俺は今でも鮮明に覚えている。

そんな女に、「お前が他の男に犯されるところを見たい」などと——。

喉の奥が酸っぱくなった。胃液が逆流しかけている。自己嫌悪が臓腑を焦がし、それでも下腹に溜まった熱は消えてくれない。むしろ、この嫌悪そのものが薪となって、暗い炎をさらに煽っている。

「……くそっ」

誰にも聞こえない声で、唇の端から罵倒が零れた。

俺は、救いようのない獣だ。

---

限界は、ある日突然やってきた。

その夜、ゆきこはいつもより少しだけ薄い生地のパジャマを着ていた。別に何の意図もなかったのだろう。衣替えの季節で、厚手のものを洗濯に出しただけのこと。

だが、寝室の間接照明に透けるゆきこのシルエットが、俺の網膜に焼きつく。

鎖骨の窪みに溜まる影。パジャマの胸元から覗く、わずかな谷間の起伏。寝返りを打つたびに布地の下で揺れる乳房の輪郭。

その一つ一つが、頭の中で別の文脈に変換されていく。

——この鎖骨を、俺ではない誰かの唇が這う。谷間に顔を埋めるのは、俺よりも広い肩幅を持つ男。布地の下の乳房を鷲掴みにするのは、俺よりも大きく、節くれだった指。

心臓が喉元まで迫り上がってきた。こめかみの血管がどくどくと脈打ち、耳の奥で自分の鼓動が轟く。

ゆきこが寝返りを打った。彼女の膝が俺の太もみにぶつかる。その些細な接触で、ペニスが跳ねるように勃起した。

だめだ。

ゆきこの隣にいてはだめだ。このまま隣にいたら、衝動のまま彼女を組み敷いて、あの妄想を垂れ流しながら腰を振ってしまう。

俺は音を立てないようにベッドを抜け出し、壁際に身を寄せた。

背中を冷たい壁に押し付けて、荒い呼吸を殺す。ボクサーパンツの中で屹立した自分自身が、布地を押し上げて存在を主張していた。先端から滲み出した液体が、じわりと布地を湿らせている。

触りたい。

握りしめて、あの映像を再生しながら、射精するまで扱きたい。

だが、ゆきこがすぐそばにいる。三メートルと離れていないベッドの上で、安らかに眠る妻のそばで、こんなおぞましい自慰に耽るわけにはいかない。

「あなた……？」

心臓が止まるかと思った。

振り返ると、ゆきこが上体を起こしていた。暗闘の中でも、彼女の大きな瞳が月明かりを受けて濡れたように光っている。

「何か、あったの？」

その声には純粋な心配しか含まれていない。それが余計に胸を抉った。

「……なんでもない。ちょっとトイレに」

嘘が、今度は声にならなかった。語尾が掠れて消え、沈黙が落ちる。

ゆきこはベッドから降り、裸足のまま俺のそばへ歩み寄ってきた。パジャマの裾が膝上で揺れる。月光に照らされた彼女の素足が、フローリングの上で白く浮かんでいた。

「嘘。こここのところずっとおかしいもの。ご飯も食べないし、夜もろくに眠れてないでしょう」

細い指が俺の手首に触れた。その温もりが、氷のように冷えた俺の指先に染み渡る。

「話してほしいの。お願い」

逃げ場がなかった。壁と、ゆきこの瞳に挟まれて、俺の体は硬直していた。喉に詰まった言葉の塊が、食道を逆流して口腔を焼く。

「……ゆきこ」

絞り出した名前は、自分でも聞き取れないほど細かった。

「俺は……最低の、人間なんだ」

ゆきこの表情が変わった。血の気が引き、唇の色が薄くなる。彼女は俺の言葉の意味を、別の方向に受け取ったのだろう。

「え……病気なの？ねえ、病院は？検査は受けたの？」

矢継ぎ早の問いかけ。俺の両手を掴む彼女の指が、微かに震えていた。

その指の震えが、俺の最後の堤防を決壊させた。

「違う……体の病気じゃない。もっと……もっとおぞましいものだ」

声が裏返った。鼻の奥が熱くなり、視界が滲む。

「お前に……嫌われたくなかった。失いたくなかった。だから隠してた。ずっと、ずっと一人で……」

嗚咽が喉を割って出た。三十歳の男が、妻の前で子どものように泣き崩れている。その醜態を晒す自分に吐き気がした。それでも、もう止まらなかった。

## 第2話：妻が囁いた「抱かれてあげる」

ゆきこは何も言わず、ただ俺の手を握り続けていた。

泣きじゃくる俺の呼吸が落ち着くのを、辛抱強く待っている。その沈黙の優しさが、刃よりも深く胸を抉った。

「……話して。どんなことでも」

静かな声だった。震えを押し殺しているのが分かる。それでも、逃げる気配はない。

俺は涙と鼻水で汚れた顔を袖で拭い、壁に背中を預けたまま、搾り出すように言葉を継いだ。

「俺は……ゆきこが、俺以外の男に……抱かれてるところを想像すると……体が、どうしてもなく反応しちゃうんだ」

沈黙。

月明かりの中で、ゆきこの瞳孔がわずかに開くのが見えた。瞬きが止まり、唇が薄く開いたまま固まる。

数秒。あるいは数十秒。体感では永遠に近い時間が流れた。

「……それは……冗談で、言ってるの？」

声に温度がなかった。お湯でも水でもない、ただ空気を震わせただけの音。彼女の指が、俺の手首からゆっくりと力を失っていく。

「冗談じゃない。本当なんだ」

俺は自分の股間に目を落とした。この土壇場でさえ、ボクサーパンツの中の肉は萎える気配がない。むしろ、告白という行為そのものが燃料となって、下腹を内側から押し広げるような圧力が増している。

「こうしてお前に打ち明けてる今この瞬間も、俺の体は……こんなふうになってる」

自嘲が唇から漏れた。涙の跡が頬に冷たい線を引いている。

ゆきこの視線が、一瞬だけ俺の下半身に落ちた。そしてすぐに逸らされた。

「……いや」

彼女の声が、初めて明確に震えた。

「いやよ、そんなの……汚い……」

その言葉が、胸骨に杭を打ち込まれたような衝撃をもたらした。視界の端が暗く翳り、両手の指先から血の気が引いていく。

当然の反応だ。貞淑を絵に描いたような女に、夫が「他の男に犯されてくれ」と懇願している。拒絶されて当たり前だ。軽蔑されて当然だ。

「分かってる……分かってるんだ……！ ごめん、忘れてくれ。全部、俺が悪かった……っ」

膝が折れた。フローリングに崩れ落ち、両手で顔を覆う。指の隙間から嗚咽が漏れ、肩が痙攣するように揺れた。

これで終わりだ。ゆきこは明日、実家に帰るだろう。離婚届が届くのも時間の問題だ。俺は最愛の妻を、自分の醜い欲望で失う。

……どれくらいそうしていただろう。

指先に、温もりが触れた。

顔を上げると、ゆきこが俺の前にしゃがみ込んでいた。その指が、涙で濡れた俺の頬に添えられている。

彼女の瞳から、嫌悪の色が消えていた。代わりに湛えられていたのは、深い哀しみと、それを凌駕する慈しみだった。

「……ずっと、一人で抱えてたのね」

掠れた声。唇の端が、微かに歪んでいる。泣くのを堪えているのだと気づいたのは、彼女の睫毛の先に小さな雫が光ったからだだった。

「私がそばにいたのに……あなたは、独りで苦しんでた」

「違う……お前のせいじゃない。俺の頭がおかしいだけだ」

「おかしくなんかない」

ゆきこの声に、不意に芯が通った。

「おかしいのなら、こんなに泣いたりしない。自分を恥じたりしない。あなたは、ちゃんと苦しんでる。それだけで……あなたが本当に私を愛してくれてるって、分かるもの」

その言葉が、胸腔に熱い液体を注ぎ込むように沁みた。呼吸が詰まり、新たな涙が頬を伝う。

ゆきこの手が、俺の頭をそっと引き寄せた。パジャマ越しに感じる彼女の胸の柔らかさと、鎖骨の下で脈打つ心臓の鼓動。その音が、俺の耳朶に直接伝わってくる。

しばらくの間、ゆきこは何も言わず、ただ俺の髪を撫でていた。

やがて、彼女の胸が大きく上下した。深い、深い呼吸。覚悟を飲み込むための呼吸だと、俺には分かった。

「……正直に言うわね」

声は平坦だったが、鎖骨の下の心拍数は明らかに上がっていた。俺の耳が、その加速を正確に拾う。

「想像しただけで、吐きそうになる。知らない男に体を触られるなんて、屈辱で、おかしくなりそう」

言葉が一つ落ちるたびに、俺の体が縮む。胃が絞り上げられ、喉の奥に苦い味が広がった。

「でも」

ゆきこの指が、俺の髪の中で止まった。

「あなたをこんなにボロボロにしたものの正体が、ようやく分かった。私にしか治せない病なら……私  
が、治すしかないじゃない」

心臓が、一拍飛んだ。

顔を上げると、月光の中にゆきこの横顔があった。唇は引き結ばれ、睫毛の影が頬に落ちている。怯えている。間違いなく怯えている。それでも、瞳の奥には、暗い海の底で光る深海魚のような、静かで確かな覚悟が灯っていた。

「……いいわ。あなたが望むなら」

彼女の唇が、ほとんど音にならない声で続けた。

「他の男に、抱かれてあげる」

---

その言葉を聞いた瞬間、俺の体に何が起きたか。

まず、全身の毛穴が一斉に開いた。背筋を氷水が駆け下りるような悪寒と、下腹を内側から焼く溶岩のような熱が、同時に脊髄を貫通した。



嗚咽が喉から噴き出す。感謝なのか絶望なのか、自分でも判別がつかない慟哭が、深夜の寢室を震わせた。

「ゆきこ……ごめん……」

言葉にならない言葉を繰り返しながら、俺は彼女の体に縋りついた。パジャマの布地を握りしめる指は、もう感覚を失いかけている。

「ごめん……ありがとう……ごめん……」

ゆきこは黙って、俺の背中を撫で続けた。規則正しく、壊れ物を扱うような手つきで。その掌の温もりが背中を通じて臓腑に届くたびに、嗚咽がひときわ強く噴き上がった。

どれくらいの時間が経っただろう。やがて俺の呼吸が落ち着き始めた頃、ゆきこが静かに口を開いた。

「約束して」

俺は彼女の顔を見上げた。涙で滲んだ視界の中で、ゆきこの輪郭が揺れている。

「何があっても、私を手放さないで。終わった後も、あなたの隣にさせて」

喉が詰まった。頷くことしかできず、何度も、何度も首を縦に振った。

「当たり前だ……お前だけだ。お前以外には、誰も……」

ゆきこは小さく息を吐き、俺の額に唇を寄せた。乾いた唇の感触が、祝福のように額を伝う。

「それと、私の体のこと。ちゃんと考えてね」

「ああ……ピルは必ず飲んでもらう。相手も慎重に選ぶ。危ない目には絶対に遭わせない」

矢継ぎ早に答える俺の声は、まだ鼻声で情けなく歪んでいた。ゆきこは微かに頷くと、俺の手を取って立ち上がった。

「ベッドに戻ろう。今夜はもう、何も考えなくていいから」

その言葉に促されてベッドに横たわると、ゆきこが背中から俺を抱きしめてきた。小さな体が、俺の広い背中にぴたりと張り付く。彼女の吐息が、首筋の産毛をくすぐった。

眠れるはずがなかった。

ゆきこの呼吸が規則正しくなり、腕の力が緩んでも、俺の目は冴えたまま天井を見つめていた。

暗闇の中で、新たな映像が頭蓋の内側に投影される。

今度の妄想には、音があった。

ゆきこの喘ぎ声。それも、俺が知っている控えめな吐息ではない。聞いたことのない、喉の奥から絞り出されるような甘い叫び。見知らぬ男の腰が彼女の体を揺らすたびに、ベッドのスプリングが規則正しく軋む音。肌と肌がぶつかる湿った打音。そして——彼女の唇から零れる「もっと」という、俺に向けられたことのない懇願。

ペニスが、布地の下で痛いほど硬くなっていた。先端から溢れた液が、下着の繊維に染み込んでいく湿った感触。

奥歯を噛み締めた。顎関節が鳴るほど強く。

この妄想の中で俺の妻を貪っている男は、まだ顔がない。けれど、ゆきこの了承を得た今、その男はいずれ現実の輪郭を持つことになる。

その事実が、胃の底を鉛で満たし、同時にペニスの根元から腰骨にかけてを焼けた鉄の帯で締め上げた。

ゆきこの寝息が、背中に温かく当たっている。

この体が、いずれ俺以外の男の下で反り返る。この唇が、俺ではない名前を呼ぶ。この指が、俺のものではない背中を掻きむしる。

視界が歪んだ。枕に顔を押し付け、声にならない嗚咽を噛み殺す。涙が枕カバーに吸い込まれていく。

それなのに。

ペニスは一度も萎えることなく、夜明けまで脈打ち続けていた。

